水稲の秋冬期管理情報第１号
（イネ白葉枯病、イネ縞葉枯病、スクミリンゴガイ）

令和２年１１月１７日
愛知県農業総合試験場
環境基盤研究部病害虫防除室

収穫後の耕うんを秋期、冬期の２回以上行いましょう！！

１　秋冬期耕うんの有用性

本年、**イネ白葉枯病、スクミリンゴガイ（ジャンボタニシ）**の発生量がやや多い状況でした。また、ヒメトビウンカの**イネ縞葉枯病**ウイルスの保毒虫率が高い地点もありました。

収穫後に耕うんを行うことで、これらの病害虫の次作での発生量を減らすことができます。

なお、収穫後の耕うんは、秋期（12 月まで）、冬期（１～２月）に各１回以上行うことが理想です。

２　秋期管理（イネ白葉枯病、イネ縞葉枯病）

（１）イネ白葉枯病

９月下旬の巡回調査において、**イネ白葉枯病の発病株率は** 3.79%（平年 1.80%、前年 9.76%）と**やや高い状況でした。**尾張、海部地域を中心に、**ほ場全体で発病株が見られたほ場**も報告されています。

本病の病原菌は、被害わら、もみで越冬し、次作の伝染源となるため、秋期に稲わらをすき込みましょう。また、畦畔雑草であるサヤヌカグサでも越冬するため、畦畔除草を行いましょう。

（２）イネ縞葉枯病

８月下旬における巡回調査では、本病の発病株率が 0.05%（平年 0.18%、前年 0.16%）と平年並でした。しかし、一部ほ場で、ヒメトビウンカのイネ縞葉枯病ウイルス**保毒虫率が高い地点**があったため、注意が必要です。

本病は、ヒメトビウンカが媒介します。**ひこばえがヒメトビウンカの生息場所になるほか、発病株のひこばえは病原ウイルスの伝染源となります**ので、収穫後、できるだけ早く耕うんするなど、ひこばえを放置しないようにしましょう。ヒメトビウンカは、畦畔等のイネ科雑草でも越冬するため、ほ場周辺や畦畔等の除草を徹底しましょう。

３　冬期管理（スクミリンゴガイ）

７月下旬の巡回調査において、**スクミリンゴガイの発生ほ場率は、34.8%（平年 24.8%、前年 32.5%）と、過去 10 年で最も高い状況**でした。

スクミリンゴガイは、水田や用排水路で土中に潜って越冬します。寒さに弱いため、**厳寒期（１～２月）に耕うんを行い、貝殻を破壊するとともに、寒風にさらすことで、越冬量を減らすことができます。**

耕うん後は、**トラクターをよく洗浄し、未発生ほ場への持ち込みを防止**しましょう。

４　その他

イネ白葉枯病、イネ縞葉枯病が発生した地域では、箱施薬を検討しましょう。

スクミリンゴガイの防除対策については、農林水産省がマニュアル等（アドレス：https://www.maff.go.jp/j/syouan/syokubo/gaicyu/siryou2/sukumi/sukumi.html）を公開していますので、参考にしてください。